JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議

JUDInews四国

発行日　2000年1月20日　　編集・発行人　白石高啓　　編集長　大西泰弘
発行所　都市環境デザイン会議 四国ブロック JUDInews四国編集事務局
〒760-0050 高松市亀井町8-12 MO環境設計内
電話 087-831-8662
FAX 087-831-8663

VOL.21
2000.01

JUDI中国ブロックと意気投合の

「瀬戸内しまなみ海道・風景学フォーラム」が開催されました

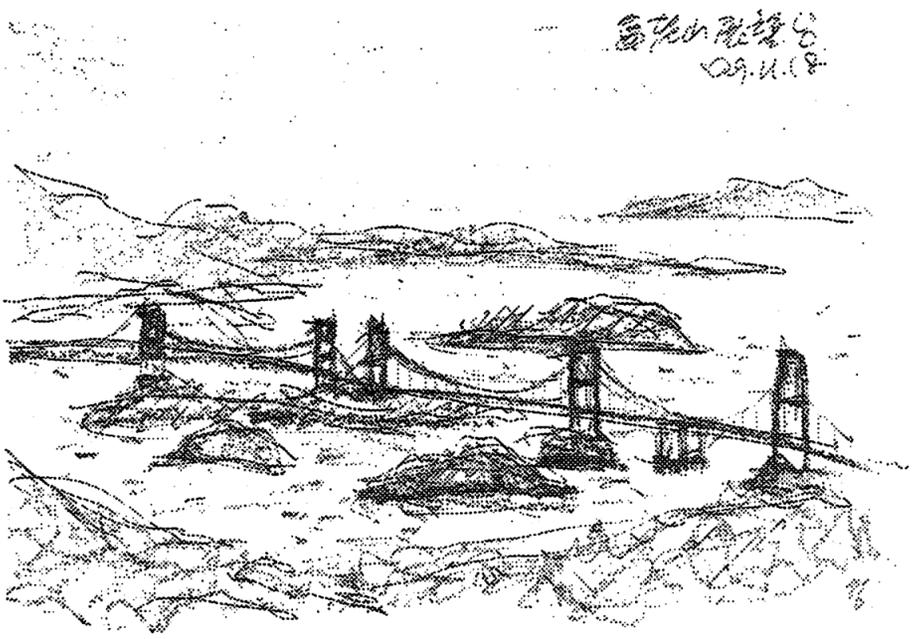
JUDI四国ブロック幹事　白石高啓（ゆにて設計）

フォーラム後の12月5日、愛媛新聞に愛媛大学法文学部藤目節夫教授（地域システム論）のグループの実施したアンケート調査「瀬戸内しまなみ海道観光意識調査」が掲載されていた。自然と文化としての「しまなみ海道」の評価は高く、藤目教授は「しまなみ海道人気は一過性のものではなく、定着するだろう。今後、地域の財産をどのように生かすか、知恵をしぼっていかなければならない」と語っていた。（アンケート集計結果は図-1参照）

さて伯方町をメインに開催したフォーラムは11月19日～20日で40名が参加した。「しまなみ海道」開通によってJUDI中国・四国ブロックの協同開催、さらに伯方町役場との共催で多様な内容となった。特にバスの利用、資料収集、会場設営と伯方町役場の職員の方々には 大変お世話になった。

初日（19日）は過密スケジュールで亀老山展望台（愛媛県吉海町）～平山郁夫美術館（広島県瀬戸田町）を見学し、途中、愛媛県と広島県を結ぶ美しい斜張橋「多々羅大橋」を小春日和の中、瀬戸の潮風が快く空の青と海の碧の素晴らしさに感動しながら、約50分かけ全員徒歩で渡った。しまなみ海道の「歩いて渡れる橋」は先見性のあるユニークな試みである。

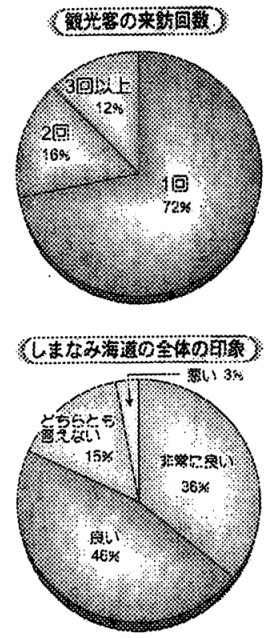
翌20日午前の「風景学フォーラム」では地元と外部からの見方がクリアーに示された。「橋が出来ることによって多くのものが失われつつある」多島海のデリケートな環境をこれ以上傷つけたくない叫びのような声と、「夕日と橋の対比は感動的風景をより演出してくれる」と風景への積極的な働きかけを評価する声、どちらにも真実があり複雑な想いがよぎる。ある風景画家は「スケッチをしたい雰囲気になれなかった」橋は果たして瀬戸内海に相応しいのだろうか？「3橋のなかで、しまなみ海道はゆっくりと歩きながら、生活が見え落ち着いた気持ちなれ、島々の連なりは素晴らしいく安心感がある」、「いろいろの施設や風景を見たが、亀老山展望台（図-2）からみた風景は感動的だった。そして島四国遍路の培われた、さりげないお接



▲亀老山からの眺望（画／高倉哲朗・高倉設計事務所）

待で癒されたという旅人がいた」他、愛媛新聞（1999.11.21）に掲載されているので省略するが、しまなみ海道には冒頭の藤目教授が分析した魅力ある人や文化と風景が充満している。ミレニアムを迎える今、一石を投じたい一念から開催できた歓びは大きく又、「しまなみ海道」沿のまちにとって大変有意義であったと…如何でしょうか？

▲図-2　亀老山展望台（愛媛新聞記事より）



▲図-1　しまなみ海道アンケート集計

瀬戸内しまなみ海道・風景学フォーラム

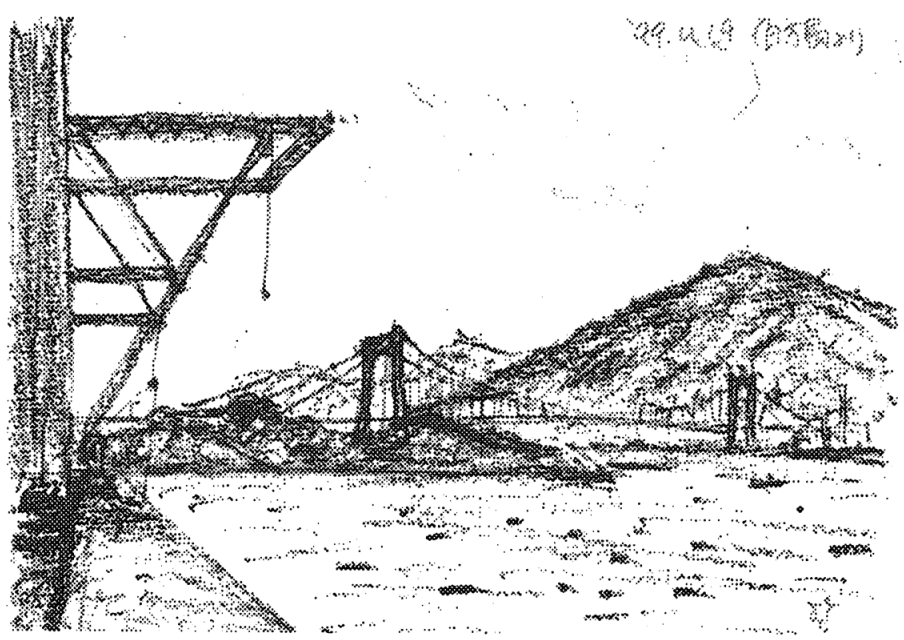
「地域コミュニティの確かさを感じる」

JUDI中国ブロック幹事　(株)ＡＫｉ建築設計事務所　秋本　徹

四国ブロックの方々。先日は大変お世話になりました。共催と言う形をとりながら中国ブロックの会員は2人の参加と言う結果は申し訳なく思っております。

中国･地域づくり交流会の活動の中で、5年位前、「しまなみ会議」と言う形で伯方島でフォーラムを行いました。当時の伯方島の人々は橋が出来ても観光と言う形で、島を素通りして欲しくない、伯方島は良いところが沢山あると言うのが大方の意見でした。住民の人々が地域に誇りを持っているというのが当時の私の感想でした。今回のフォーラムでも橋が出来ても、その意識は何ら変わっていないと思いました。便利になって、島の経済構造が変化しても？住民の意識が変わらないということの根底にあるものに非常に興味を持ちました。大山祇神社周辺の前と後ろが変わろうとしているあの地域でさえ、変化には目もくれず淡々としているあの雰囲気は、何なんでしょうか。やはり地域コミュニティの確かさでしょうか。

話は極端ですが、インドネシアのバリ島での観光開発が進む中で、バリアガと呼ばれている人々の相変わらずの生活と同じ臭いを感じました。橋が出来る前から見ている伯方島を今後もその変化を見ていきたいと思います。



▲伯方島の風景（画／高倉哲朗・高倉設計事務所）

瀬戸内しまなみ海道・風景学フォーラム

「風景、しまなみ―風の景」

JUDI中国ブロック　倉敷　長沼眞智子

1999年、11月19日20日両日、中国四国ブロック主催の、“瀬戸内しまなみ街道風景学フォーラム”に参加した。

仕事の関係で、宿泊がかなわず、倉敷より山陽自動車道を通って2日間2往復したが、瀬戸内海の島々にかかる橋を実際に渡って、美しい島郡や風を体感できたことはこの先も忘れることができないほど深い印象となって心の中に残るものとなった。

この様に深い印象を受けたことの要因は自分自身の風景の捉え方の変化にあった。以前、いつの頃からか、風景とは目で見るもの、壁にかけられた絵を見るように、風景は私以外、私は私であった。現在、時代の変遷とともに自分自身の物事の捉え方も変わり、それによって風景の捉えかたがちがってきている。

いろいろなヴァーチャルなコンピューターの世界に遊んでいるせいであろうか、風景の中に入り込もうとしている自分自身がある。このことは個人としての心象の変遷を述べるものではない。時代としての風景の捉え方の移り変わりに言及するものである。これらの事象は、現代の経済的な潮流やトレンドを見ればよくわかる。たとえば、感覚としての具体的な例をあげるならば、遊園地における映像によるとりかこみ、体感音楽、ゲームの画面の中に入り込んで自分自身が主人公になってプレイしているような感覚などがあげられる。また空間を移動することにより、時空論的なとらえかたで風景を捉えて行くといった方法論も、事態の発端としてはすでに存在している。このことについてはオギュスタン・ベルクが、不完全な試論としての仮説として、西欧のポスト二元論と東アジアの非二元論の統合から新しい風景がかたちを取ることになるであろうということに言及している。この様に風景は風景そのものとして完成された形を論じるものではなく、人間(自分自身)が風景に取り囲まれることによってはじめて完成されたものになるということを論じるべきであるということである。このような近代における意識や意味のとらえかたの変遷は、受け取り手側の意識の発達と無縁ではない．近代におけるインターネットなどの通信手段の発達により、私的領域が公的領域に参加することによって物事の構築がなされるといったような事象がこのような物事のとらえかたの変遷の根幹を成しているといっても過言ではなかろう。このことはまず経済的な潮流としてこれからの消費の先端的特質となって行く。アルビン・トフラーは著書「第三の波」において“創造的消費者”として位置付けている。

この様に風景の捉え方を論じるにあたって経済的な論点から消費を位置付けることは決してレトリックや意味のすり替えなどではない。受け取り手側の意識の変革はまず経済的な事象に具体的な形となって現れたからである。

これからの風景を論じるにあたっては、われわれ人間それ自体が感情や感覚を持って風景を捉えるものであるということを認識しなおす必要がある。それによって風景に対する認識や意識の新しい兆候を捕らえることができればと思っている。

▲全員で歩いて渡った多田羅大橋

▲懇親会